

# 東北復興日記



171

山形県南部の高畠町は「まほろば」の地と称されています。「丘、山に囲まれた実り豊かな住みよい所」という意味です。住民の約八割が有機農業を含む環境保全型農業に取り組み、奥羽山脈から湧き出る清流の恵みを受けて生きものがにぎわう水田で、コメ作りをしています。テラウエア、リンゴ、ラ・フランスな



早稲田大学早稲田環境学研究所講師 たかはた共生プロジェクト副代表 吉川成美さん



## 消費者の信頼を再び

どの果樹も里を彩ります。

農業汚染、公害問題が全国で吹き荒れていた一九七三年、農家で詩人の星寛治さん

「写真」を中心に、機械化や

化学農薬・肥料を投与する農

業近代化に疑問を抱いた農家

青年二十八人が高畠有機農業

研究会を発足。「提携」によ

る有機農業運動を始めまし

た。環境問題をテーマにした

有吉佐和子のベストセラー

「複合汚染」も星さんのリン

ゴ農園を取り上げています。

提携とは、農家と消費者が

ともに学んで支えあう信頼関

係のもとに、自然を大切に

た有機的な生活を目指すもの

です。以来、農家と消費者は

話し合いで決めた価格による

コメやリンゴなどの農産物を

介して、提携を実践してきま

した。私も早大から高畠に通

い、二〇一一年に出版された

「高畠学―農からの地域自

治」(藤原書店)の中で提携

の生の声をまとめました。

出版直前、東日本大震災と

原発事故が発生。隣接する福

島から多くの人が避難してき

ました。原発から八十五キロの

高畠町も深刻な風評被害を受

けました。同年秋の注文は八

割減り、四十数年積み重ねて

きた提携はたちまち危機に。長年、食の安全を重視して提携を実践してきた消費者は、見えない放射能汚染や公表される数値を疑問視し、防衛策を取ろうと必死でした。

農家は消費者に去られた動揺と風評被害の痛みを、こらえるしかありません。これま

で早大は学生を高畠に送ってききましたが、農産物の提携は

行っていないませんでした。そこで、ここは提携のあり方を見

直す機会ととらえ、「たかはた共生プロジェクト」をスタートすることにしました。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。